

日本文化史3（近世）

信長・秀吉の時代から江戸時代全部の文化。ということで、扱われるテーマも多いですし、出題率も高いですね。〇〇文化という時代全般を扱うものや、文学史などといったテーマ史でも出題されますし、政治史などの枝間（オマケ）として出題されたり、と手を変えて出題されます。

1. 桃山文化

①特徴

信長・秀吉の頃の文化を総称して**桃山文化**という。新興の大名や豪商たちが担ったこの文化の特徴は、彼らの財力を基礎にした**豪壮・華麗**な文化であり、あわせて、南蛮文化の影響を受けたものであった。なお、「桃山」とは伏見城の後の地名である。

1)建築物

鉄砲伝来によって築城術が変化し、平城や平山城は造られることとなった。深い濠と土塀で城郭を守るだけでなく、高い石垣の内部には武器庫・食料庫・井戸を備え、城櫓・城門が設けられた。中心の天守閣は、司令塔であり、また権威の象徴としての意味を持つ。次第に1～3個の天守閣をつなぐ連立式天守閣が多く造られるようになった。この頃のもので現存しているものは、姫路城・松本城・犬山城・彦根城（ゆるキャラのヒコにゃんは可愛い。しかし、みんながみんな可愛いとは言えないよね。ある種不気味なものもある）・丸岡城くらいである。

聚楽第の遺構とされる西本願寺飛雲閣（一度だけご好意で入れていただいた！）・大徳寺唐門・伏見城の遺構とされる都久夫須麻神社の本殿や西本願寺の唐門・書院（鴻の間）もある。茶室では、千利休が造ったという京都山崎の妙喜庵待庵が有名である。

2)絵画

絵画は、城郭の中を飾った障壁画が中心である。障壁画の作家としては、狩野派は知られる。狩野正信は、東山期、室町幕府の御用絵師になった人物であるが、彼以後、「大徳寺大仙院四季花鳥図」を描いた元信。桃山期の作家で濃絵の大成者永徳は、「唐獅子図屏風」や「洛中洛外図屏風」を描いた人物として知られる。さらに、狩野長信は、江戸初期の御用絵師として京都から江戸に移住し、「花下遊楽図屏風」を描き、永徳の養子山楽は「松鷹図」を描いた。水墨画では、海北友松が「山水図屏風」を描き、長谷川等伯も「智積院襖絵」を描いている。

3)工芸

書院の内部を飾った欄間彫刻が施された。西本願寺の「ぶどうとりす」の彫刻はなかで

も有名である。陶磁器は、茶道の隆盛と朝鮮人陶工により優れた作品が数多く制作された。

「お国焼」以外に、京都で楽焼が長次郎によってはじめられた。漆器では秀吉の夫人の調度品で知られる高台寺蒔絵があり、服飾でも辻ヶ花染がなされた。

4)印刷術

活字印刷は、ヴァリニャーニが伝えた南蛮系のもの（金属活字＝キリシタン版）と朝鮮から伝えられた木活字がある。キリシタン版には、『平家物語』や『どちりなきりしたん』という教義問答書がある。

5)茶道

豪商を中心とする町衆の間では茶道が広まっていった。1587年、秀吉が行った「北野大茶会」はその代表である。千利休以外には、今井宗久・津田宗及が知られ、三宗匠とよばれた。なお、茶器ははじめ中国のものが珍重されていたが、利休らによって日本製のものが用いられるようになった。

6)芸能

辻能とよばれ道端で行われていた能だけでなく、17世紀はじめに出雲阿国が阿国歌舞伎をはじめた。また、琉球から蛇皮線が入り、三味線に改良され、浄瑠璃の伴奏などに使われた。小歌では、堺の高三隆達が節つけした隆達節が盛んとなった。

7)南蛮文化

南蛮文化は、衣食・絵画などに影響を及ぼした。天文学・医学などもあわせてもたらされた。南蛮屏風の中で「世界地図屏風」などがるが、これは、日本に西洋の絵画技術が入り、日本人が描いたものである。

2. 寛永期の文化（江戸初期の文化）

1) 文化の特徴

寛永期を中心とする文化は、桃山文化と元禄文化の間にあり、桃山文化の特徴（豪壮・華麗）を受け継ぎ、一方で元禄文化の時期に花開く庶民性のある文化である。

2) 儒学

特に朱子学が発達した。その代表者は藤原惺窩である。彼はもともと相国寺の僧侶であったが、五山の腐敗に失望し、還俗した。惺窩によって朱子学は、禅から分離された。藤原惺窩の弟子林羅山も元は建仁寺の僧侶であった。羅山は、師の教えを進め、朱子学を確立し、家康に用いられた。そして、1630年上野忍ヶ丘に家塾を建てた。

3) 建築

建築では華麗な霊廟建築である**日光東照宮**が知られている。権現造の本殿が中心で、家康の墓・寺院・神社を兼ねている。これに対し、書院造と茶室を合わせた数寄屋造の**桂離宮**がある。後陽成天皇の弟八条宮智仁親王の別邸であった。かつて、ドイツ人建築家ブルーノ＝タウトが絶賛したことでも知られている。ついで、後水尾上皇の別荘として営まれた修学院離宮は、1655年に起工された。

4) 絵画

狩野探幽が知られる。「大徳寺方丈襖絵」などの作品で知られ、幕府の御用絵師となったが、以後衰退していった。これに対し、狩野派を破門されたといわれる久隅守景は、「夕顔棚納涼屏風」に見られる庶民的な絵を描いた。また、京都の**俵屋宗達**は、「風神雷神図屏風」（風邪薬のCMでおなじみの風の神様の元祖です）を描いたことで知られている。

工芸では、楽焼・蒔絵などの名作を残した**本阿弥光悦**が知られる。家康は、光悦に京都洛北鷹ヶ峰を与えた。光悦はここに一族を連れて移り住み、芸術村を作った。

肥前有田焼は、**酒井田柿右衛門**によって赤絵が完成され、有田焼の名を高めた。

5) 文学

室町時代の御伽草紙を受け継いだ**仮名草紙**が盛んになる。但し、内容は教訓・啓蒙的なもので、文学的には未熟だと言われている。作品としては、**如備子**の『可笑記』、浅井了意の『東海道名所記』、鈴木正三の『二人比丘尼』などがある。俳諧では京都の松永貞徳が貞門派を開いたが、芸術的な価値は乏しかったとされている。

3. 元禄文化

1)文化の特徴

5代将軍綱吉の頃を元禄期というが、この頃を中心に上方の豪商を主な担い手とした文化が誕生した。この文化は、合理主義的な特色が強く、「憂き世」とされた中世的な考え（現実否定的）な考えから脱却し、現実肯定の「浮き世」という欲望肯定・人間性追求の傾向が強い文化であった。

2)儒学

幕府が儒学を封建制支配の思想としたのは、**五倫・五常**という道德観が身分秩序の維持に適していたからである。五常とは、仁・義・礼・智・信という根本原理であり、より身近な人間関係を律する実践倫理として五倫が説かれた。五倫とは、君臣の義、父子の親、夫妻の別、長幼の序、朋友の信をさす。

①朱子学

この五倫・五常の考えをストレートに示したものが朱子学である。なかでも京学は、藤原惺窩の系統を引き、幕府の政治顧問（侍講）となった林羅山の林家は、鳳岡が大学頭となったことからその地位が高まった。林家とは別に、松永尺五・木下順庵の門下（木門派）がある。門下には、新井白石・室鳩巢・雨森芳洲がいる。白石は、『読史余論』などを著した人物として知られる。室鳩巢は、『駿台雑話』を著し、雨森芳洲は、『芳洲口授』を著した。

京学とは別に、土佐の南学からは**崎門派**がある。山崎闇斎は朱子学と共に、京都で吉田神道を学び、神儒一致の**垂加神道**を説いたことで知られる。闇斎の号を垂加といたったことにちなんでのことである。また、土佐藩の家老であった野中兼山は藩政改革にも尽くした人物である。

②陽明学

陽明学は、明の王陽明がはじめた朱子学批判の学で、心即理・知行合一をいう実践重視の学である。はじめ朱子学を学び、次第に陽明学に転じた**中江藤樹**は『翁問答』を著した**近江聖人**ともよばれ、近江に藤樹書院を作った。弟子の**熊沢蕃山**は、池田光政に仕え、『大学或問』で幕政を批判したため、下総古河に幽閉された。

③古学

朱子学・陽明学は、孔子や孟子の説いた説を解釈したもので、原典を重視し、そこから学ぶべきだと考える人たちも生じた。古学派の誕生である。

兵学者であった**山鹿素行**は、『聖教要録』を著し、朱子学を批判したために赤穂へ配流された。配流された期間のことを素行は、『配所残筆』にまとめている。さらに、日本こそが世界の中心（中華）だとした『中朝事実』や『武家事紀』を著している。

ついで、京都の豪商出身の**伊藤仁斎**は、京都堀川に**古義堂**（堀川塾）を作り、『童子問』や『論語古義』・『孟子古義』を著した。子の**東涯**は、古義学を大成した人物で『制度通』を記した。さらに、江戸の**荻生徂徠**は、人間社会の秩序は、理の働きで作られた自然の秩序（朱子学の考え）ではなく、聖人という古代の理想的な人間によって「作為」されたものであり、それは絶対変化しないというものではなく、社会（＝秩序）は人間が作るものだとした。徂徠は主君の柳沢吉保に仕え、さらに8代将軍吉宗の諮問に答えて『政談』を著した。徂徠は江戸萱場に**護園塾**^{ほんえんじゅく}を作り、弟子を育てた。徂徠の経世論を受け継いだ弟子の**太宰春台**は、『経済録』を記している。

3)歴史学

儒学の持つ合理主義的な考えは、歴史学にも影響を及ぼした。幕府は林家に命じ、1670年羅山・鷲峰の努力によって『本朝通鑑』が完成した。『本朝通鑑』は、中国の『資治通鑑』

を模倣した編年体の書物で、神代～後陽成天皇までを記し、310巻ある。また、幕府自身で編纂した徳川家の歴史書『東照宮御実記』もある。

徳川光圀は、1657年から『大日本史』を編纂した。これは、本紀（帝王中心の歴史）と列伝（重要人物の伝記）、志（各分野ごとの歴史）、表（氏姓・官職などの表）からなり、史料名を記し、文章の根拠を示す記し方を採用している。『大日本史』はその後、1906年にようやく完成し、実に397巻からなっている。

新井白石も6代将軍家宣に講義した『読史余論』をはじめ、『古事記』・『日本書紀』などを比較研究した『古史通』を著している。特にここで『魏志』に注目していることは驚くことである。さらに『藩翰譜』では、大名家の系図・事績の検討をしている。

4)実学

当時、自然科学を実学とよんだ。まず、本草学。もともと中国から入ってきた学問で、日本でも古代以来研究がなされてきた。元禄期には単なる植物学から博物学に発展した。貝原益軒は、朱子学を学び、『大疑録』を著したが、『大和本草』を著したことで知られる。また、加賀の前田綱紀の保護を受けた稲生若水は、『庶物類纂』を書いている。

農学では、明の徐光啓の『農政全書』に学んだ宮崎安貞が、1697年、『農業全書』を著した。農書には他に、伊予の土居清良が記したという最も古い農書、『清良記』や、会津の佐瀬与右衛門の『会津農書』、加賀の『耕嫁春水』や『百姓伝記』などがある。

数学では、中国数学の研究から和算が生まれた。角倉了以の外孫、吉田光由が『塵劫記』を記した。また、関孝和は、『発微算法』を著し、筆算による代数計算や、円・円周率を研究した。彼の弟子、建部賢弘は、円柱の体積の公式を利用し、用水路のトンネルを掘る際に役立てた。だが、和算は、実用にはあまり用いられず、「算額」という形で神社に掲げて解答を求める遊びになってしまった。

天文学では、安井算哲（渋川春海）が、1684年、貞享暦を作成した。これは平安時代以来使用されてきた宣明暦の誤差が大きくなったため、元の「授時暦」をもとに作成したものである。暦は江戸時代を通じて太陰暦が使用されていた。太陰暦では、1カ月は29.53日が基準で、1年を大月（30日）、小月（29日）とし、これを交互に置いた。そうすると1年間は、太陽暦では365日であるが、太陰暦では354日しかならず、太陽の運行と誤差が生じるので、19年に7回閏月^{うるう}を調整した。これを「十九年七閏説」という。貞享暦の後、宝暦・寛政・天保に改暦がなされた。

5)文学

寺子屋や私塾の広がり庶民が文字を読むことが可能となり、さらに木版印刷も盛んになったため、文学が読まれるようになった。元禄時代の印刷物は、全国7200余種類、総部数100万部を超えた。後の享保期には京都・江戸・大坂で出版業者は300軒あったという。

この時代の代表は浮世草紙であろう。浮世草紙の代表作家井原西鶴は、はじめ談林派の

俳人として知られ、矢数俳諧というジャンルで有名な人であった。その後、西鶴は小説に転じ、『好色一代男』を著した。西鶴の作品は大別すると、男女の性欲を肯定した「好色物」、町人の生活を記した「町人物」、武士社会の道徳を取り上げた「武家物」がある。さらに、諸国の怪奇談を記した「諸国物」もある。町人物では『日本永代蔵』・『世間胸算用』などが、武家物では『武道伝来記』や『武家義理物語』がある。諸国物では、『西鶴諸国はなし』や『西鶴置土産』が知られる。

俳諧は、貞門派の後、談林派が広まったが、**松尾芭蕉**が登場し、作品としての完成度が高まった。芭蕉は伊賀藤堂藩出身の武士の出であったが、俳諧師の道を進み、さび・しおり・細みといった日本的な美を追求した。作品としては、紀行文として知られる『奥の細道』や句集『猿蓑』がある。芭蕉の門人を蕉門十哲（蕉門派）といい、向井去来や各務支考、服部嵐雪らがいた。

6) 芸能

町人が受容したもう一つのジャンルが演劇である。農民出身の**竹本義太夫**は、さまざまな節を集め、**義太夫節**を完成した。彼と**近松門左衛門**が組み**人形浄瑠璃**が発展した。近松の作品は、時代物と世話物とに大別される。時代物は歴史劇で『**国姓爺合戦**』・『**出世景清**』がその代表であり、世話物は、義理と人情の板ばさみに苦悩する人間を扱い、『**曾根崎心中**』・『**心中天網島**』などがある。これらの作品を人形使いの辰松八郎兵衛らの協力で行った。

一方、女歌舞伎が弾圧されて後、若衆歌舞伎が演じられたが、これも弾圧され、成年男子による**野郎歌舞伎**が演じられることとなった。俳優には、江戸の荒事（金平物）の**市川団十郎**、上方の和事の**坂田藤十郎**、女形の芳沢あやめが出た。

7) 美術

狩野派や土佐派といった伝統を重んじる絵画が衰退したのに対し、庶民の絵画ともいべき**浮世絵**が次第に広がっていった。肉筆画以外に木版画も作られた。作者としては、「**見返り美人図**」の**菱川師宣**が知られている。

また、京都の**尾形光琳**は、俵屋宗達の影響を受け、新たな装飾画を描いた。光琳の弟尾形乾山は、陶器に独特の絵付けをした。

8) 工芸

京焼の祖といわれた野々村**仁清**や、染色では宮崎友禅らが活躍した。また、遍歴僧の円空は、臨済宗の布教の傍ら**鉦彫**といわれる素朴な「**聖観音像**」や「**両面宿儺観音像**」を作った。

4. 化政文化

(やはり、学問と文学に関する出題が多いです。学問は、教科書の系統図などをそのまま使っているあまりいただけない問題もあります。ともかく、人物と著作をきちんと整理しておいてください。)

1)特徴

化政文化の特徴は、①江戸を中心とした文化であること。②退廃・無力さが現れていること、③庶民文化の広がり、④学問・思想の科学的。実証性の高揚をあげることができる。

◆この4つに加え、①と関連するが、「^{ぶんうんとうぜん}文運東漸」ということができる。つまり、文化が上方から江戸に拠点を移したことで、出版でも江戸に書籍印刷・販売の店が増加しているし、各ジャンルの文化でも同様のことが指摘できる。

2)儒学

儒学は、朱子学を正学とする異学の禁が出されたにもかかわらず、**古学**(=徂徠学)が広がった。とはいえ、朱子学も**昌平坂学問所**が1797年に設置されたことで、依然として封建教学としての役割を果たしていた。一方、古学は経世学(世を治める学問、政治・経済の学問)としてよりも、詩文鑑賞を主とする^{はっとりなんかく}服部南郭の学派が主流となった。また、諸説を折衷する折衷学派が興り、^{いのうえきんが}井上金峨・^{かたやまけんら}片山兼山らの提唱は、田沼時代に最盛期を迎えた。考証学も中国から伝えられ、^{かりやまきさい}狩谷掖斎・^{まつぎまこうどう}松崎慊堂・安井息軒らが中心となった。

3)国学

はじめは、元禄期に水戸藩主徳川光圀の依頼によって『万葉集』の研究を行った真言宗の僧**契沖**からはじまった。契沖は、『**万葉代匠記**』で、万葉集が大伴家持の撰になることを証明しようとしたのである。この後を受けたのが、京都伏見稻荷神社の神官であった**荷田春満**である。彼は日本の古典研究だけでなく、『**創学校啓**』を幕府に提出し、京都周辺に国学の学校を作るよう要望した。「国学」という言葉はこの時誕生したが、未だ儒学排斥の立場は見られない。

春満の弟子であった遠江の神官**賀茂真淵**は、国学独自の歴史観を樹立した。真淵には『国意考』や『万葉考』など70余りの著作があるが、とりわけ『国意考』は、国学の復古思想を表明した書物として知られ、儒学からの自立を説いたものである。

真淵の弟子で国学の大成者として知られるのは、伊勢松阪の医者であった**本居宣長**であった。本居は『古事記』の研究に没頭し、35年間を費やして『古事記伝』を発表した。本居には他に多くの著作があるが、その思想を要約すれば、古道=神が創った道に帰れというものであった。

本居の後の国学者としては、考証的な研究をした伴信友や盲目の学者で、日本の古典の

収集・分類を行い、『群書類従』を著した^{はなわほきいち} 塙保己一がいる。

国学者の最後の人物としてあげなければならないのは、秋田藩士^{ひらたあつたね}平田篤胤である。篤胤は、国学の文学的要素を取り除き、実践的活動に重点を置いた**復古神道**を大成した。その後、復古神道は、神官・地方豪農などに受容され、幕末の尊王攘夷思想と結びついた。

4) 蘭学

国学に対して近代社会の形成に大きな影響を与えたものが蘭学であった。蘭学と通常一括して述べるが、「鎖国」以前には南蛮学すなわち、**蛮学**と言ったが、『解体新書』翻訳後、**蘭学**と言われるようになり、幕末に英仏の学問が入り**洋学**と言われるようになった。

蘭学は出発点においては、幕府。藩の学者や知識人によって学ばれた。元禄期に**西川如見**が『華夷通商考』を著し、世界の地理一般について紹介した。西川には他に『町人囊』^{ふくろ}という書物があるが、まず、彼から蘭学がはじめられるきっかけが生まれた。

文治政治の正徳期に、**新井白石**がイタリア人宣教師で、屋久島に潜入したヨハン＝シドッチを訊問し、『采覧異言』・『西洋紀聞』を著した。『采覧異言』は、世界地理書で、『採用紀聞』は西洋研究書として知られる。

18世紀になると8代将軍吉宗の漢訳洋書の輸入の禁が緩和され、青木昆陽・野呂元丈に命じてオランダ語の学習を行わせた。

医学では、すでに1754年、**山脇東洋**が『臈志』を著していたが、ついで、**前野良沢**をリーダーに**杉田玄白**・**中川順庵**・**桂川甫周**によって『ターフェルアナトミア』という解剖書の翻訳にとりかかり、『解体新書』が完成した。その翻訳にあたっての苦労は、玄白の『蘭学事始』に詳しい。この書物の表紙・解剖図は、平賀源内に洋画を学んだ秋田藩士の小田野直武が描いたものである。

蘭学はこれ以降大きく発展し、玄白の弟子であった仙台藩医**大槻玄沢**は、蘭学入門書『蘭学階梯』を著した。また、江戸に芝蘭堂という塾を設立し、ここで玄沢は、門弟らと共に太陽暦で正月を祝う「おらんだ正月」を行った。また、玄沢の弟子**稲村三伯**は、長崎のオランダ通詞石井庄助の協力を得て蘭日辞書『**ハルマ和解**』を出版した。同じ原書をもとにオランダ商館長ゾーフが編集した『ハルマ和解』もあり、こちらを長崎ハルマといい、三伯のものを江戸ハルマという。

天文学では、まず麻田剛立^{ごうりゅう}が学問の近代化に努めた。この門下から高橋至時^{よしとき}や間重富^{はざましげとみ}らが出た。さらに、**志筑忠雄**が『曆象新書』を著し、ニュートンの万有引力の法則を紹介したが、これより早く本木良永がコペルニクスの地動説を紹介している。さらに、高橋は寛政曆改曆にあたった。

本草学は、元禄期から貝原益軒の活躍が見られたが、スウェーデンの学者ツンベルグが安永年間に来日し、蘭学と結びついた。その関係で**宇田川榕庵**^{ようあん}は同じスウェーデンの学者リンネの説を紹介した『**菩多尼訶経**』^{ぼたにかきょう}を著している、さらに彼は、『**舎密開宗**』^{せいみかいそう}という化学書も著している。

地理学では、50歳を過ぎてから学問を志した**伊能忠敬**が、1800～18年までの期間を費やして全国を測量し、彼の死後「**大日本沿海輿地全図**」が刊行された。

物理学ではエレキテルで有名な**平賀源内**や帆足万里の著した『窮理通』が知られている。

最後に蘭学の教育機関について。1811年、高橋景保の建議で作られた蛮書和解御用は、1853年に洋学所に、56年には蕃書調所、62年には洋書調所、63年には開成所となった。公的機関には、これ以外に、1858年に設立された種痘館が、60年に種痘所、61年には西洋医学所、63年医学所となった。塾では、先に記したものの以外に、シーボルトの鳴滝塾、緒方洪庵の適塾が知られる。

5)学問・教育

江戸時代後半、文化は庶民に普及し、地方に広がっていった、庶民は寺子屋（注意！「寺子屋」であって寺小屋ではありません。寺子とは生徒のことです。間違わないように。）で読み・書き・そろばんを身につけた。寺子屋は、すでに享保期に約800以上あったと言われている。（少しだけオマケ。この寺子屋では、障がいをもった子どもたちに教育がなされていました。お師匠さんが色々努力していたのです。詳しくは、『キーワードブック 障害児教育』クリエイツかもがわの私が書いた項目をお読みいただくとわかります。でも、すごいでしょ。）また、教育に関係するものでは、享保期に京都の町人石田梅岩がはじめた心学をあげることができる。心学は、神儒仏三教の教えを融合したもので、儉約・正直といった徳目を平易に教えるものだった。梅岩の後、手島堵庵により全国に広げられた。

私塾では、蘭学塾以外にもいくつかの塾が設立された。大坂の懐徳堂は、大坂の町人たちが出資して設立されたもので、富永仲基・山片蟠桃らが活躍した。また、豊後日田の広瀬淡窓の咸宜園^{かんぎん}、萩の吉田松陰らの松下村塾も知られている。各藩では、藩学が設立された。藩学は江戸時代を通じて約280校設立された。庶民にも開かれた郷学は岡山の閑谷学校や大坂平野の含翠堂が知られている。

6)文学

小説

小説はジャンルの分化が目立つ。**洒落本**は、遊里における客と遊女との会話を記した作品である、その代表作である**山東京伝**の『仕懸文庫』は、遊女が着替えを入れて持たせる箱のことで、タイトルで当時の人々にはその内容が理解できたはずである。京伝が寛政の改革期に弾圧されたのは、遊里の風俗・生活を細々と記したからであった。

一方、絵入り小説である**黄表紙**は、草双子の総称とされたものである。**恋川春町**の『**金々先生栄華夢**』は、金兵衛という主人公が見た夢、つまり遊里＝吉原で豪遊した話である。恋川は、別の作品『**鸚鵡返文武二道**』^{おうむがえしぶんぶのふたみち}で寛政の改革を批判したという理由で弾圧されている。

これらの作品が衰えた後、両者の滑稽さを受け継ぎ記されたのが、**滑稽本**であった。江

戸庶民の娯楽場であった銭湯と床屋に集まる人々の会話を写し取った式亭三馬の『浮世風呂』、『浮世床』である。また、江戸神田八丁堀の住人弥次郎兵衛と喜多八を主人公にした『東海道中膝栗毛』は十返舎一九の作品として知られている。

滑稽本と同じ系譜から出たのが人情本であり、女性向きの恋愛小説（日本江戸時代版ハーレクインロマンスか？）であった。為永春水の『春色梅児誉美』はその代表作であるが、天保の改革で弾圧された。この他には黄表紙を1巻にした合巻があり、表紙と挿絵で愛読された。代表作は、足利光という武士が光源氏のようにふるまう（源氏物語のパロディー・パクリですね）柳亭種彦の『修紫田舎源氏』（完全にパクっていることをタイトルが表していますね）がある。この作品は將軍家斉を描いているように受け取られ後に絶版を命じられている。

読み物としての面白さを追求した作品も現れた。読本である。読本ははじめ、上方で興ったもので、大坂の国学者上田秋成が『雨月物語』を著した。その後、滝沢馬琴によって読本が完成された。戦国大名里見氏に仕える八人の武士の姿を描いた『南総里見八犬伝』は、中国の『水滸伝』をベースにした作品である。（昔、この八犬伝はNHKの人形劇で夕方やっていました。犬塚しのとか、「玉ずさの怨霊」とかって。この作品は、八人の剣士がそれぞれ玉を持っていて、集めるとパワーが出るということになっているのですが、よく考えてみてください。なんだかどこかで、同じような作品知りませんか？そう。ドラゴンボールの江戸時代版だと私は予備校の授業で言っていました。だって、玉集めてパワーが出て、水滸伝じゃなくて、西遊記に変えると、ドラゴンボールじゃないですか。もし、この推測が当たっているとしたら、作者の鳥山さんはずいぶん勉強していると思うのですがね。カメカメ波と亀仙人、スーパーサイヤ人等々。うまく別のキャラクターを登場させ、違う世界を表現したと思います。一度興味があれば、是非、八犬伝も読んでください。誰か、ドラゴンボールと八犬伝の比較をした研究しないかな。それとももうなされているのでしょうか？わかったら教えてください）これ以外には、南の島に住むようになった源為朝を主人公にした『椿説弓張月』が知られる。これら読本の説く内容は、儒学の理念にかなう勧善懲悪・因果応報の思想であり、人間性の表現としてはもう一つというべきであろう。

俳諧・川柳・狂歌

俳諧は天明期に京都の与謝蕪村が活躍した。蕪村は俳諧だけでなく、和詩（漢詩に倣って和文で作った詩）にも優れていた。その後、化政期には信州→江戸→信州での生活を続けた小林一茶が現れた。両者の代表的な句をあげれば、蕪村の「菜の花や 月は東に 日は西に」や「菜の花や 和泉河内へ 小商」（かつて共通一次試験だったと思うが出題されました）があり、一茶の方では「初雪や いろはにほへと 習ふ声」などをあげることができる。

これに対し、川柳と狂歌は庶民も楽しんだ。川柳は、5・7・5の前句づけの遊びから

はじまったもので、後に柄井川柳が点者となったことからこうよばれるようになった。狂歌は、和歌から派生したもので、言葉のもじりに特徴がある。

川柳の代表作をあげよう。

○「勝った日は 意見言わぬが 女なり」（旦那さんは、博打に勝ったのです。「あんた！また、博打してきたのかい！！」という言葉で、いつもの喧嘩に…という情景）

○「これ小判 たった一晩みてくれろ」（庶民の切実な願い。でも、小判なんて持っている貧乏な庶民なんていませんよ。）

○「兄はわけ知らず祝ふ 小豆飯あずき」（実は、兄ではなく、妹のお祝いなのです。ちゃんと小豆飯とありますから、赤飯を炊いてのお祝いです。私の場合は、姉はもう亡くなりましたが「弟はわけ知らず…」でした。「なんで、今日、赤飯食べるの？」を数回連発したら姉にビンタをもらいました。という話です。わからない人にはわからないままで結構です。）

○「松ヶ岡までにまんじゅう二つ喰ひ」（松ヶ岡は縁切り寺があった場所です。嫌な夫から逃げて離婚するために、まんじゅう2つしか食わずに逃げたという話です。）

○「初鯉 家内残らず見たばかり」（初鯉はうまい。だのに、夫は一切れも妻にあげることなく食べてしまいましたとき。）

○「ぬか味噌へ 思ひ切る手の美しさ」（新婚さんなのでしょうね。べたべたして臭う糠味噌の漬物を取り出す若妻ってところでしょうか。綾乃小路きみまるさんの世界、「あなたも昔は若妻で美しかった」ではありませんよね。）などがある。

7)演劇

落語や講談は江戸・大坂に**寄席**が作られ、興行されるようになった。落語では、三笑亭可楽（初代）が寄席の興隆に努め、三笑亭円生（初代）や林家正蔵などの名人が出た。

浄瑠璃では、近松門左衛門の後、**竹田出雲**が『仮名手本忠臣蔵』を書き、近松半二が『本朝廿四考』を著したが、その後衰退し、唄浄瑠璃が盛んになっていった。常盤津節・清元節などがそれである。しかし、人形浄瑠璃の再興も企てられ、淡路島の植村文楽軒が寛政期に大坂で小屋を建てた。これが文楽のはじまりである。

一方、歌舞伎は人形浄瑠璃の影響を受け、舞台に工夫がなされた。回り舞台・せり上げ・どんでん返し・花道などである。作家としては、**鶴屋南北**（第四世・大南北）の『東海道四谷怪談』がある。南北の作品は、下層社会で生活する庶民の姿を生々しく描く「生世話物」ととばれる作品で、芝居の中ではたくさんのからくり＝ケレン（外連、俗受けをねらって演じること）を取り入れたものである。四谷怪談以外の作品には、『桜姫東文章』が知られる。幕末になり歌舞伎は、三代目瀬川如皐と**河竹黙阿弥**が出て、生世話物の再興をはかった。黙阿弥には盗賊を題材にした『白浪五人男』や世話物の代表作『三人吉三 廓 初買』がある。この頃の俳優には、4代目市川小団次が知られている。

8) 絵画

浮世絵の創始者は、元禄・正徳期に活躍した**菱川師宣**である。彼は美人画を得意としたが、それを版画にすることで安価に庶民に提供した。といっても、この頃の版画は、黒・赤の2色にしか過ぎず、彼の代表作「見返り美人図」は版画では表現できなかったために、肉筆画である。宝暦・明和期に入り、**鈴木春信**が出て**錦絵**とよばれる多色刷版画を創始した。彼の作品には、「弹琴美人」や「ささやき」などがある。続く寛政期には「婦女人相十品」など多くの美人画を描いた**喜多川歌麿**と斬新な役者絵・相撲絵の傑作を残し、「市川蝦蔵」で知られる**東洲斎写楽**は、人物の上半身だけを描く大首絵を完成させた。

19世紀、天保期に入ると風景画が盛んとなり、「**富嶽三十六景**」を描いた**葛飾北斎**や「**東海道五十三次**」で知られる**歌川広重**が知られる。これらの浮世絵は、開国後、ヨーロッパに輸出され、フランスを中心とする後期印象派に影響を与えた。浮世絵は幕末になると政治の動きを描く時局絵が盛んとなり、芸術的には低迷した。ただ、土佐藩出身の御用絵師**林洞意**を名乗り活躍したが、偽作事件に巻き込まれ町絵師になった**弘瀬金蔵**（絵金）だけが歌舞伎絵を描いて名を知られた。

浮世絵以外では写生画が発達した。円山応挙・松村月溪（呉春）は円山派・四条派を率いた。さらに文人画がある。これは中国の南画の影響を受けたもので、池大雅・与謝蕪村合作の「十便十宜図」は有名である。また**谷文晁**・**田能村竹田**・**渡辺崋山**も文人画を描いている。西洋画は、**平賀源内**がはじめた秋田系と江戸系に分けられる。源内に蘭学を学んだ**司馬江漢**は「不忍池図」を描き、**亜欧堂田善**は「浅間山図屏風」を描いた。

9) 社会思想

尊王論

尊王論は、享保の改革後、垂加神道を学んだ竹内式部が京都で公家に神道を講義した。竹内はその結果、1759年追放された（宝暦事件）。また、1767年には山県大弼が幕政を批判したために死刑に処せられた（明和事件）。この他に寛政の三奇人といわれる林子平以外の2人の人物、高山彦九郎（京都の京阪三条に銅像があります。立っているのではなく、御所に向かっておじきしています）・蒲生君平が尊王論者として知られ、蒲生は『山陵誌』を著したことでも知られる。

化政期には、『日本外史』を著した頼山陽が出た。さらに幕末には後期水戸学が盛んになり、藤田幽谷とその子東湖、会沢安らが出た。幽谷は、水戸藩藩校彰考館総裁として引き続き『大日本史』の編纂を続け、子の東湖は後期水戸学を代表する『弘道館記述』を著し、会沢も『新論』を発表した。

◆こうした尊王論台頭の背景には、幕政の動揺とそれを食い止めるための大政委任論の台頭が幕府の幹部自身によって語られたといったことがある。

経世論

経世論では、武士帰農論を説いた**荻生徂徠**や、『**大学或問**』を記し、参勤交代を緩和して

徂徠と同じく武士帰農論を説いた**熊沢蕃山**がいる。蕃山の弟子**太宰春台**は、『**経済録**』で商業藩営論を説いた。さらに海保青陵は、『**稽古談**』で商業経済論を説いた。

本多利明は洋学を学んだ人物でもあり、その著作『**経世秘策**』・『**西域物語**』では外国との貿易による統一国家の強化を説いた。また、秋田の学者**佐藤信淵**は、『**経済要録**』で富国強兵を説いた。

農学

度重なる飢饉・凶作の中から農村の復興を提案する人が現れた。二宮尊徳は、報徳仕法を説いて、農民の儉約・勤労を勧めた。また、大蔵永常は『**広益国産考**』で商品作物の栽培を奨励した。

その他の思想

大坂の懐徳堂出身の**富永仲基**は、『**出定後語**』で儒学・仏教を批判し、**山片蟠桃**は、『**夢の代**』で無神論を説いた。さらに、**安藤昌益**は、秋田に生まれ、陸奥八戸で医者として生活するかたわら『**自然真営道**』や『**統道真伝**』を著し、人間の平等を説いた。(昌益については、自殺したカナダの外交官で日本近代史の研究者でもあったハーバート＝ノーマンの『**忘れられた思想家**』を是非読んでください。古い岩波新書で、一度再刊されてもいます。古書店で手に入れてください。謎の思想家扱いされていた昌益を紹介したのが、日本人ではなくて、カナダの外交官だったことに驚きました。大学生の時に、ゼミの先生からお金を貯めてでも買えと言われたノーマンの全集もあります。日本近代史の研究者としても、非常に優れた人です。アメリカの赤狩りで疑われ、確かエジプトの大使館で自殺したのです。惜しい人物です。)

これら以外に、三浦梅園は条理の学(哲学)を提唱し、その原理書として『**玄語**』をさらに**道德説**として『**敢語**』を**物価論**として『**価原**』を著している。「(日本に哲学なし」と言った人もいますが、決してそんなことはありません。)

10)庶民の生活・文化

江戸後期になると人々は、各地の動向に関心を示すようになった。社会の流動化に伴う情報化社会に入ったということもできる。その情報を伝えたものが、「**かわら版**」(「よみうり」とも言う)であった。また、伊勢神宮や善光寺参りなどが盛んに行われ、旅行が流行した、それと共に「**名所図会**」とよばれる観光案内図も作成されるようになった。例えば、「**都名所図会**」(京都)や「**江戸名所図会**」などがそれである。

信仰と旅行を兼ねた有名な寺社参詣のうち、伊勢参りは60年に1回の割で、「**おかげ参り**」、「**抜け参り**」などと呼ばれる熱狂的なブームが発生していた。

都市庶民の衣服は次第に派手になっていったようである。もちろん、改革期の儉約令がくり返し出されている中で、庶民はそれぞれのやり方を考え、「おしゃれ」を楽しんだ。し

かし、農村部ではそのような余裕がなかった。食生活も都市部では次第に贅沢になり、「そば」、「うどん」などが食べられるようになり、料理屋が急増した。

住居も都市部、特に江戸では火災の多さから瓦葺の家が増えていった。農村では依然として藁葺きの家が一般的であった。庶民が娯楽に興じる回数も増えた。各種の演芸だけでなく、寺院の縁日や開帳を利用し、その境内で行われる各種の演芸を楽しむことになった。また、庶民が講を作り、特定の日に集まって遊ぶ日待・月待や庚申講が盛んとなった。さらに、**五節句**（1月7日＝七草、3月3日＝上巳、5月5日＝端午、7月7日＝七夕、9月9日＝重陽）も行われた、

文化が地方に普及していったこともこの時代の特徴であった。その代表者の一人菅江真澄は遊歴の文人で、1783年から28年間奥羽・蝦夷地を歩き、辺境の伝統・生活・習俗などを記した『真澄遊覧記』をまとめた。また、越後の縮商人でもあった鈴木牧之^{すずきぼくし}の生活体験は『北越雪譜』として刊行された。（この『北越雪譜』も岩波文庫で手に入ります。雪の結晶の挿絵もあって読むと楽しいです。読んでみてください。）